ブラック・ディスクこそ「生き甲斐」4

●オルトフォン ジャパン(株)代表取締役社長
前園俊彦

いまの時代,デジタルを嫌って「アナログしか聴かない」と言うと,確実に変人の烙印を押されてしまいます。仕事の為にする発言ではなく,個人として昔からそれで通して来ているのだからしょうがありません。CD誕生後,アナログ・レコードの終焉が告げられたのは,一体何回くらいあるでしょうか,その都度私は,「文化を殺してはならない」と叫び,必死で守ろうとしてきましたし,毎月1回,小さいながらも地域でLPレコード・コンサートを開いて,アナログの素晴らしさをアピールしてきました。それももう10年になろうとしています。

なぜアナログなのか。いろいろ理由はありますが,何といっても音がデジタルより温かく,人を感動させる力があるから。最近,管球アンプ製作家として知られる新忠篤さんが解説したSPレコード・コンサートでドリス・デイやコラボーケルを聴き,感動して涙しました。LP以前のSPですらこうなのです。スペックは感動が伴ってこそ意味があるということを再確認しました。

音質はもちろん,もっと大切なことはアナログには機械いじりの楽しみがあることです。アナログプレイヤーはやることが山ほどあります。トーンアームから,カートリッジのよりごのみ。針圧ひとつ,シェルとリードワイヤーの交換ひとつで音がガラガラ変わります。実に大変で面倒ですが,努力すれば結果に鋭敏に反映され,やらない人との間に差が出てきます。これが人を夢中にさせる,趣味の趣味たるゆえんだと思うのです。また,アナログには「儀式」が伴うのも素晴らしいことです。ターンテーブルが廻りだして,ジャケットから取り出した盤面のほこりを丹念に拭う,セットした上にスタビライザーを置き,カートリッジの針先のゴミを丁寧に取り去って,狙った位置に針先を落とす。人によっては,呼吸を止めて正確さを期すほどです。音が出る前の,このわずかなひとときに込められる濃密な期待感と緊張感。これこそがアナログ・オーディオの醍醐味といえるのではないでしょうか。

仕事と趣味で、オーディオに50年係わってきた「自分だけの音」

ブラック・ディスクこそ「生き甲斐」

T.Maezono

◀前園氏が手にしているのは，ウェスタン・エレクトリックWE-211Dのスペア管。JBL4350はタテ置きで使用，ドイツ・CANTON製スーパー・ツイーターをプラスして，5ウエイを3アンプ・マルチ・チャンネルでドライブしている。4350上のホーンはYL音響の吉村社長と一緒にベニアで作ったMB-90プロトタイプ・スピーカー。早くからホーンの魅力にとりつかれた氏ならではの思い出の深い一品。

▲SPUを21本！ 並べていただいたが,これでも所有カートリッジのホンの一部。
下はオルトフォンEQ-A1000フォノイコライザー。

アナログは今が「旬」

さて,私のリスニング・ルームで大切にされてるものはカートリッジ,それもオルトフォンSPUです。SPUというのは「ステレオ・ピック・アップ」の意味で,ロバート・グッドマンセン氏を含む3人の技術者が1958年に創り上げた,文字通り世界を代表するカートリッジです。私が初めてSPU G/Tを手に入れたのは,4年後の昭和37年ですから早い方です。当時,山水電気(株)に勤務しており給料は手取りで3万円未満，それより高価なSPU G/Tはとてつもなく高い買い物でした。しかしそれ以来SPUの魅力は私を捉えて離さず,その後も数多くのSPUを求めることになりました。その一つに故岩崎千明氏からいただいた大切な製品も含まれていて,私の宝物になっています。

昭和63年,オルトフォンにヘッドハントされ,新しく日本にオルトフォン・ジャパン(株)を創ることになりました。そしてご縁があって「カートリッジの神様」と呼ばれるグッドマンセン氏と一緒に,SPUの開発に携わることになりました。デンマーク本社での会議で,氏からの「新しい線材が欲しいが,日本で開発出来ないか」という要請を受けて，私は線材の開発をさせていただきました。日本で最大級の非鉄金属大手,同和鉱業(株)研究所の力をお借りして，6N銅から7N銅,そして8N銅。銀線では,不純物を極限まで取り去った超純銀というべき6N銀。一昨年には,純金と純銀を一定率で配分したエレクトラムを開発し,グッドマンセン氏に大変喜ばれました。1992年に8N銅線を使ったSPU MISTERを創られた時には,出来の良さに満足してシェルに署名を入れてくれましたし,1996年，6N銀による音の進歩をご自身の耳で確認した氏は,これを採用したSPU MISTER SILVERが完成した時「私が今までに創ったカートリッジの最高の作品」と喜び,製品の銘板にその文言を自らの手で刻み込んでくれました。

ここ数年の間に,オルトフォンのカートリッジは大変進歩しています。発電の構造までも原点にもどって見直されていますし,その時点で最も進歩した素材を使って飽くことなく限界にチャレンジが繰り返されています。最新のカートリッジで聴く,レコードに隠されていた驚きの音に出会うのが私の楽しみであり,アナログは今が「旬」なんだと,会う人ごとに言っています。

サンスイ時代の思い出～JBL4350

山水電気(株)に勤めていた時代には,企画担当として輸入販売を開始したJBLと深く関わることになりました。サンスイで企画したSP-LE8TやSP-707Jなどの認可を受けに,ロサンジェルスのJBL本社を訪問した際,帰途に375ドライバーと535-500 蜂の巣ホーン・システムを入手したのも忘れがたい思い出です。

今使っているスピーカーは，JBL 4350の初期モデル(アルニコタイプ)です。家に来たのが昭和52年の春ですから,もう25年にもなる大古女房です。当時私は商品企画部長をしており,新宿西口に新設したサンスイ・オーディオセンター・ショールームの所長を兼務していました。

そしてその頃,東芝EMIレコードのミキサーをされていた行方洋一さんの人気番組「サンスイQSサロン」の中で,録って来たばかりの蒸気機関車をショールームで思いっきり鳴ら

◀マイクロRX-5000プレイヤーを糸ドライブを2重連で駆動，回転ムラを極限まで減らすテクニックだ。プリアンプは，現在ビジュアル再生を試しているため，ソニーのTA-E9000ESを使用している。
▼常用機が故障中とのことで，この日は以前使っていたパイオニアのチャンネル・デバイダーD-23を使用。となりにヤマハのスーパーウーハーYST-SW1000が見える。上に乗っている不思議なものは，ロシア製のライフル型望遠レンズ・フォトスナイパー。

すことを企画しました。サンスイから当時出たばかりの最高級パワーアンプBA-5000をBTL接続600Wのモノアンプで使い，JBL4350を4台接続するという無茶をやりました。タイトルは「耳が勝つか，スピーカーが勝つか，140dBの音への挑戦」というもの凄いものです。

三重連の蒸気機関車があえぎあえぎ山路にさしかかり，吹き出す蒸気，激しいドレンの金属音，小石が粉砕され，飛び散る音。現物以上のすさまじい迫力に，思わず逃げ出したくなる最大音圧エネルギー。まさに鼓膜が悲鳴を上げようとした時，突然音が止み，深い沈黙，恐ろしい程の静寂が訪れました。キャパを超えた歪が原因で，アンプではなくスピーカーのボイスコイルが，全て一挙に焼け飛んだのです。しかし，全員が改めてJBLの実力を知ることになりました。壊れる前の音の凄さから「恐るべきスピーカーだ」というのがみんなの出した結論です。縁あって，その時の2本がきれいに修復されて我が家に来ることになりました。長い年月のうちに，私なりに細かい改良を加え今日にいたってますが，相変わらず高いジャズスピリッツを歌い続けてくれています。

「オーディオは楽し，されど苦し」

オーディオという趣味の面白さは，手本のない面白さであり，終点のない面白さでもあります。言葉を換えるとジャッジメントを下すのが自分しかいない，という面白さであり，また難しさでもあるわけです。「自分の心を満たす音はなにか？」の答えは，常に自分のアイデンティティを問うことでもあり，そのためには「こだわり」をもって，飽くなき探求と前進が課せられるのです。

世の中，いろいろな趣味がありますが，私は無我夢中でただ一筋に打ち込めるいい趣味に巡り会うことが，人間の一番の幸せではないかと思います。趣味で感性を磨くことによって自らが高められ，最終的には仕事に還元されて成功の源となる，と信じるからです。そこに「生き甲斐」が生じて，人生の目的が見えてくると思うのです。ですから私は，モットーとして「仕事は遊び心で，趣味は生命がけで」をいつも胸に置いています。

私のもうひとつの趣味にカレー作りがあります。最初は訪ねてくださるお客様のもてなしで作り始めたのですが，やってみると誠に奥が深い。独学では限度があると，ついに料理学校へ行き，インド人シェフについて習うことにしました。本格的にやってみると大変です，玉ねぎ炒め6時間，スパイスは全部石臼で摺りおろさないと香が立たない。熟成時間を入れると2日以上かかりますが，工程の全てにこだわりをもって作らない

◀文中にあるLPレコード・コンサートのひとこま。(株)千代田テクノルとの共催で，月に一度ゲストを招きチャリティー・コンサートを開催している。この日のゲスト，新宿「DUG」の中平穂積氏と談笑する前園氏。

▲超大型真空管WE-211Dプッシュ・プル30Wモノラル・パワーアンプをJBL4350のウーファーに使用中。
文中に登場する新(あたらし)忠篤氏の力作で,中高域には同じく新氏製作のWE-329Aダブル・プッシュ・プルアンプを愛用している。
「4350が嬉しそうに鳴り始めたよ。」と語るご自身が一番嬉しそう!?

と,本当においしいカレーは食せないのです。本場のカレーは沢山のスパイスのブレンドで作る料理ですから,作る人の個性がでます。私も何年かやってるうちに,何とか「前園カレー」を作れるようになりました。酷暑の時期の2日間以上に渉るカレー作りは大変な苦労を伴いますが,客人のおいしい顔を見ていると,これがいっぺんに吹き飛びます。

また,写真も長いこと撮っているうちに,何とかオリジナルな写真を撮りたいと考えるようになり,1920～30年代のベスト判蛇腹カメラからレンズをはずして,愛用のカメラに取り付け,ひと味違うベス単カラー写真に夢中になっております。

オーディオも同じで,「こだわり」をもって自分だけの音を作ることから始めるのが要諦ではないでしょうか。私のリスニングルームに,柳家小三治師匠からいただいた「オーディオは楽し,されど苦し」と揮毫された色紙が飾ってありますが,「苦しさを喜びに変える」ことがオーディオの極意ではないか,と最近思うようになりました。

LP?万枚収納!

自宅前庭に建てた「蔵」

なにしろオーディオ・音楽愛好歴50年以上という前園氏だけに,所有レコードの量も膨大だ。そこで前園氏は,自宅前庭にレコード収納蔵を新築された。蔵の中にはエアコンが設置されており,蒸し暑い時期には冷房をかけるそう。ここまでやる人だけに,「趣味は生命がけで」の言葉に説得力がある。